

## 博士論文要旨

学籍番号 09D006  
氏名 杉野 緑  
研究指導教員 川上 昌子 教授

### 論文題目

工業都市K市における現業労働者のライフヒストリーと生活実態の研究

### 論文の研究動機と目的

2002年に実施されたK市野宿生活者実態調査に参加したことが本研究へ取り組むことにした動機である。野宿生活者の母体は現業労働者であったことから、働き続けてきたにもかかわらず、なぜ路上生活を余儀なくされるような境遇になるのかを捉えたいと考えたことによる。その問題を広く現業労働者の問題として捉えたいと考えた。問題解決のためには全体の中にホームレスの人びとを生活基盤の脆弱な現業労働者として位置づける必要があると考えた。

現代の工業都市において脱工業化の進行が引き起こしている共通に現れている問題として考察したいと考える。現業労働者、なかでも脆弱な生活基盤しか持ち得ない現業労働者について、その生活実態を捉えることを研究目的とする。筆者の研究は、働いているにも関わらず脆弱な生活基盤しか持ち得ない人びとの生活を支える方策を探るためのものであり、現業労働者の生活のありよう、社会的特徴を明らかにすることがその基礎になると考えた。

### 研究方法

日本の代表的工業都市K市の南部地区を対象地域とする。脱工業化が始まったとされる1970年以降の変化に着目し、社会階層論の視点で捉える。

具体的研究方法は次の二つである。

第一は、政府統計書による分析である。総務省、国勢調査報告、事業所・企業統計調査報告、就業構造基本調査原票による社会経済状況の特徴と1970年以降の変化に関する量的研究である。

第二は、地域住民の生活ニーズに対応して作られていった隣保館Aホーム（1965年開設）、宿泊施設R（1951年～1989年）、ホームレス自立支援施設Y（1996年開設）、およびT（2001年開設）の社会福祉施設の利用者を分析対象として、質的研究を実施した。質的研究においてはライフヒストリーの分析を含む。筆者の研究方法は、貧困の実踏調査であり、貧困研究で重用されているソーシャルサーベイの方法である。

### 研究結果

研究結果として工業都市K市の社会階層の特徴として、現業労働者の四つの生活のありようを把握した。

江口（1979． 1980）社会階層論に倣い工業都市内部地域の社会階層把握を試みた結果、脱工

業化過程において一貫して生産労働者下層、日雇及び単純労働者などの不安定低所得階層の一定量が存在していたことを捉えることができた。その量は、高度経済成長期およびそれに続くバブル経済期において減少しておらず、バブル経済崩壊後の不況期においても増大していなかった。不況期に不安定低所得階層が増大しないことはこの地域の雇用のキャパシティの収縮であり、ホームレス発現の一因といえる。

次に、現業労働者の生活実態を地域に生活基盤を形成し得た人びとと生活基盤を形成し得なかった人びとという視点により大きく二分して捉え、さらに、それぞれの中において二つの性格の違う人びとを捉えた。

第一の①グループは、地域に生活基盤を形成することができた人びとである。第一の②グループは地域での暮らしではあるが、アパートなどの賃貸住宅に住む決して安定した暮らしとはいえない人びとである。

第二は地域に生活基盤を形成することができなかつた人びとで、生活基盤を失った人びとである。第二の①グループは、仕事のためにK市へ来て働いていたが、近年の社会経済の変化により仕事を失った人びと、今日のホームレスである。第二の②グループは、病気・怪我などにより働くことができなくなった単身労働者のグループである。宿泊施設R廃止当時の利用者や現在のK市緊急援護事業の対象となっている通常の生活ではなくなつた人びとであり、社会の最底辺に日本ではいつの時代にも存在していた人びとである。

これらの四つの生活のありようを持つグループは、相互に違いがあるとともに、製造業を中心にして交錯している線につながっていることを捉えた。

四つの中で、地域に生活基盤を形成し得た人びとである第一の①のグループの現業労働者上層についてのライフヒストリーと、生活基盤を形成し得なかつた人びとのなかの第二の①としたグループのライフヒストリーについて特に詳細に分析した。

以上を通して工業都市K市南部地区の現業労働者全体を考察の対象として、工業都市の現業労働者は、工業都市のダイナミクスに自分の労働力だけを持って取り込まれ、放り出される桔抗関係の中で暮らさなければならぬことを把握した。なかでも第一の②と第二の①のグループについては脱工業化過程においてバブル崩壊までは低位な階層の者でも継続的に就業の機会があつたためにこれらの人びとへの生活保障の必要性は考えられてこなかつたのである。この観点から、今日注目されるようになっているワーキングプアの問題も捉えられなければならないと考える。

## 研究の限界と課題

現業労働者の四つの生活実態のありようを示したが、さらに掘り下げた考察が必要である。四つのうちの二つについては資料が得られ分析できたが、他の二つについては資料の入手が不十分で深めることができていない。また、脱工業化について、およびワーキングプアについて理論的にさらに深めていくことが必要である。

## 主要文献

江口英一（1979）現代の低所得層（上）未来社

江口英一（1980）現代の低所得層（下）未来社

## 博士論文審査の結果の要旨

学籍番号 09D006  
氏名 杉野 緑  
学位授与年月日 2010年9月22日

### 論文題目

工業都市K市における現業労働者のライフヒストリーと生活実態の研究

論文審査担当者 委員長 飯田 澄美子 教授  
委員 小松 啓 教授  
委員 宮前 珠子 教授  
委員 林 玉子 教授  
委員 川上 昌子 教授

本研究は、当学生が2002年にK市ホームレス生活実態調査に参加したことから、生活基盤の脆弱な現業労働者に関心を持ち、その人々が体現する問題は何かを究明したいと考え取り組んだ研究成果である。K市において種々の機関からの聞き取りにより懸命に情報を集め、大河内一男の生活規定、生活は労働と消費生活の循環であるとする規定を基本的手がかりとして捉えていった研究である。本研究は二つの種類の社会福祉施設利用者の分析を通して、それぞれの生活のありようが作られていったこと自体を捉えることを目的としている。それぞれの背景や原因、理由それ自体を分析しようとしたのではない。それぞれの状況、ありようそのものを描き出すこと、四つのありようを析出しているが、工業都市住民の必須の側面として捉え、表すこと、そして考察することを目的としている。何らかの理論仮説を証明するか、反論するかを目的としてなされた研究ではない。しかし、対象とした現象が1970年以降という脱工業化が進展する時代における、日本における代表的な工業都市Kで生活基盤の脆弱な現業労働者の問題を研究対象としてとらえ考察したことから、有意義な成果が得られる研究とすることができている。

この論文の内容は、一つは統計を用いた1970年から2000年にかけての社会経済状況の変化と社会階層構成の変化についての分析である。もう一つは、その変化を背景にした現業労働者のライフヒストリーを中心にした生活の変化の追及である。それが、上記した四つのありようとして捉えられた。それを、今日関心を集めてきているワーキングプア論研究へ連なるものとして考察している。

以上のように、この論文は、日本経済が大きく歴史的に変化する時期の30年間を対象とし、現在に連なる問題を描き出したこと、地域での生活を仕事、住宅、家族、健康を生活基盤として生活総体を継続的に観察し分析し、具体的に明らかにしていることから今後多くの貴重な示唆を与える研究として評価できると考えものである。また、地域福祉施設の機能と役割の歴史的変化の把握は今後の施策に多くの示唆を与えるものとする。

以上の結果から、審査委員会委員全員により、本論文が著者に博士〔社会福祉学〕の学位を授与するに十分価値があるものと認められた。